

顔見知りの相手に対する話題の切り出しについて

—性別の違いと相手との関係性の違いに注目して—

高井 春 菜・田 中 大 輝

1. はじめに

本稿では、日本語母語話者（大学生）を対象とした話題の切り出しについての分析を行う。話題の切り出しとは、会話をしている一定の間が空いたときに行う話題の提示、および、会話をしているこれまでの話題から新しい話題に転換させる行為のことを指すものとする。

談話研究において、「話題転換」を扱ったものは枚挙に暇がない。日本人同士の談話における話題転換を扱ったもの（宇佐美 1998、楊 2005b など）、日中母語話者間の話題転換の比較を行ったもの（田中・崔 2014、田中 2015 など）、日韓母語話者間の話題転換の比較を行ったもの（奥山 2000、奥山 2005 など）、接触場面での話題転換の比較を行ったもの（林 2008（日韓接触）、李 2014（日中接触）など）など、研究の対象は様々である。実は「話題」という概念も「話題転換」という概念も研究者によって範囲や規定が異なり（楊 2005a：pp.161-162、田中 2015：p.131 などに詳しい）、また、一言で「話題転換」と言っても様々な下位分類が可能なのである（cf. 楊 2005a、花村 2014 など）が、本稿では、楊（2007）に従い、「話題転換」とは「先行話題の焦点とは異なる内容を会話の話題として確立させる一連の言語行動」であると捉えておく。

「話題転換」研究においては、条件を統一するなどの理由により、初対面同士の会話を対象とすることが多い^(注1)。実際、上に挙げた、宇佐美（1998）、楊（2005b）、田中・崔（2014）、田中（2015）、奥山（2000）、奥山（2005）、林（2008）、李（2014）は、すべて、初対面同士の会話を対象としたものである。ただ、初対面同士の会話では、会話の序盤が質問合戦のようになってしまい、話題の切り出しが疑問の形ばかりになってしまうことが多いことから、本稿では、顔見知り同士を対象として調査を行い、適宜、先行研究の結果と比較することにした。調査の目的は(1)のとおりである。

(1) 調査の目的

- a. 性別（男性・女性）によって、話題の切り出しのパターンにどのような違いが見られるかを明らかにすること^(注2)。
- b. 相手との関係性（同学年・先輩・後輩）によって、話題の切り出しのパターンにどのような違いが見られるかを明らかにすること。

(46)

以下、次節において、調査の協力者および調査の方法について詳しく述べる。

2. 調査の協力者・方法

2. 1. 調査の協力者

調査に協力してくれたのは、鳴門教育大学学校教育学部¹⁾に所属する大学生合計 24 名である。まとめると(2)のようになる。

(2) 調査協力者一覧 (名前順)

調査協力者名	性別	学年 ^(注3)	調査協力者名	性別	学年
A	女性	学部3年生	M	男性	学部1年生
B	女性	学部3年生	N	男性	学部2年生
C	女性	学部1年生	O	男性	学部2年生
D	男性	学部3年生	P	女性	学部1年生
E	男性	学部3年生	Q	女性	学部1年生
F	男性	学部2年生	R	女性	学部2年生
G	男性	学部2年生	S	男性	学部3年生
H	女性	学部1年生	T	男性	学部3年生
I	女性	学部1年生	U	女性	学部2年生
J	女性	学部3年生	V	女性	学部2年生
K	男性	学部1年生	W	女性	学部1年生
L	男性	学部1年生	X	女性	学部1年生

上記の調査協力者を属性ごとに分類すると(3)のようになる。

(3) 調査協力者の属性ごとの分類

	学部1年生	学部2年生	学部3年生	合計
女性	C、H、I、P、Q、W、H	R、U、V	A、B、J	13名
男性	K、L、M	F、G、N、O	D、E、S、T	11名
合計	10名	7名	7名	24名

上記の調査協力者を組み合わせ、全体で(4)のように 18 組のペアを作った。なお、会話の相手が同学年の場合と先輩 (あるいは後輩) の場合とで、同一人物における話題の切り出しがどのように異なるかを調べたかったため、組み合わせは意図的に重複させてある (3. 1. 2. 節参照)。

(4) 調査のペア

調査番号	調査協力者 1	調査協力者 2	調査協力者 1 から見た 調査協力者 2 の属性
1	A (学部 3 年生・女性)	B (学部 3 年生・女性)	同学年
2	A (学部 3 年生・女性)	C (学部 1 年生・女性)	後 輩
3	D (学部 3 年生・男性)	E (学部 3 年生・男性)	同学年
4	D (学部 3 年生・男性)	F (学部 2 年生・男性)	後 輩
5	F (学部 2 年生・男性)	G (学部 2 年生・男性)	同学年
6	H (学部 1 年生・女性)	I (学部 1 年生・女性)	同学年
7	H (学部 1 年生・女性)	J (学部 3 年生・女性)	先 輩
8	J (学部 3 年生・女性)	K (学部 3 年生・女性)	同学年
9	L (学部 1 年生・男性)	M (学部 1 年生・男性)	同学年
10	L (学部 1 年生・男性)	N (学部 2 年生・男性)	先 輩
11	N (学部 2 年生・男性)	O (学部 2 年生・男性)	同学年
12	P (学部 1 年生・女性)	Q (学部 1 年生・女性)	同学年
13	P (学部 1 年生・女性)	R (学部 2 年生・女性)	先 輩
14	O (学部 2 年生・男性)	S (学部 3 年生・男性)	先 輩
15	S (学部 3 年生・男性)	T (学部 3 年生・男性)	同学年
16	U (学部 2 年生・女性)	V (学部 2 年生・女性)	同学年
17	U (学部 2 年生・女性)	W (学部 1 年生・女性)	後 輩
18	W (学部 1 年生・女性)	X (学部 1 年生・女性)	同学年

(4)のペアを、調査協力者間の関係（同学年か先輩か後輩か、女性同士か男性同士か）に基づいて並び替えると、(5)から(10)のようになる。

(5) 調査協力者 1 から見て相手が同学年の場合（女性同士）

調査番号	調査協力者 1	調査協力者 2
1	A (学部 3 年生)	B (学部 3 年生)
6	H (学部 1 年生)	I (学部 1 年生)
8	J (学部 3 年生)	K (学部 3 年生)
12	P (学部 1 年生)	Q (学部 1 年生)
16	U (学部 2 年生)	V (学部 2 年生)
18	W (学部 1 年生)	X (学部 1 年生)

(48)

(6) 調査協力者 1 から見て相手が同学年の場合 (男性同士)

調査番号	調査協力者 1	調査協力者 2
3	D (学部 3 年生)	E (学部 3 年生)
5	F (学部 2 年生)	G (学部 2 年生)
9	L (学部 1 年生)	M (学部 1 年生)
11	N (学部 2 年生)	O (学部 2 年生)
15	S (学部 3 年生)	T (学部 3 年生)

(7) 調査協力者 1 から見て相手が先輩の場合 (女性同士)

調査番号	調査協力者 1	調査協力者 2
7	H (学部 1 年生)	J (学部 3 年生)
13	P (学部 1 年生)	R (学部 2 年生)
17	W (学部 1 年生)	U (学部 2 年生)

(8) 調査協力者 1 から見て相手が先輩の場合 (男性同士)

調査番号	調査協力者 1	調査協力者 2
4	F (学部 2 年生)	D (学部 3 年生)
10	L (学部 1 年生)	N (学部 2 年生)
14	O (学部 2 年生)	S (学部 3 年生)

(9) 調査協力者 1 から見て相手が後輩の場合 (女性同士)

調査番号	調査協力者 1	調査協力者 2
2	A (学部 3 年生)	C (学部 1 年生)
7	J (学部 3 年生)	H (学部 1 年生)
17	U (学部 2 年生)	W (学部 1 年生)

(10) 調査協力者 1 から見て相手が後輩の場合 (男性同士)

調査番号	調査協力者 1	調査協力者 2
4	D (学部 3 年生)	F (学部 2 年生)
10	N (学部 2 年生)	L (学部 1 年生)
14	S (学部 3 年生)	O (学部 2 年生)

2. 2. 調査の方法

調査の場所は、視覚情報の少ない室内とした。調査にあたって、まず、調査協力者に以下のことを説明した。

(11) 調査協力者に対する説明・注意事項

- a. 20分の会話を録音する。
- b. 個人情報は漏らさないので、どのような内容で話をしてもよい。
- c. ただし、会話に際しては、特定のテーマなどを設定してはいけない。
- d. また、歩き回ったり、携帯電話等を見たりしてはいけない。

会話の時間を20分に設定したのは、予備調査(2014年3月から5月にかけて7回実施)を経て、これが妥当な時間であると判断したからである。特定のテーマを設定することを禁じたのは、予備調査の結果、特定のテーマを設定してしまうと、話題を切り出す場面が少なくなってしまうことが分かったためである。歩き回ることを禁じたのは、歩き回るなどして視覚情報が増えてしまうと、目に付いたものをどんどん話してしまい、分析に適さなくなることが分かったためである。ものを見ることを禁じたのは、ものを取り出して見てしまうと、それに関する会話になってしまい、話題の切り出しが少なくなってしまうことが分かったためである。

3. 結果と考察

得られたデータは、調査番号ごとに、「話題の切り出しが起こった時間」「話題の切り出しを行った話者」「直前の話題」「話題の切り出し方」「話題の切り出しの終わり方」「切り出した内容」等に分けて記録した。その中で、本稿で特に焦点を当てるのは以下の3点である。

(12) 話題の切り出しの観点

- a. 話題を切り出した回数
- b. 話題の切り出しの始まりの言葉
- c. 話題の切り出しの終わりの言葉

ここで、具体例を見てみよう。まず、「話題の切り出し」とは、たとえば(13)や(14)の下線部に相当するものである。

(50)

(13) 話題の切り出し 例1 (調査番号12 PとQの会話)

(寮についての話題)

9秒の間

Q:「え、14日は行くん?」(以下、14日についての話題)

(14) 話題の切り出し 例2 (調査番号9 LとMの会話)

(逆上がりの話題)

M:「俺らダンスやからな。」(以下、ダンスについての話題)

(13)が、会話をしていて一定の間が空いたときに行う話題の提示の例であり、(14)が、会話をしていてこれまでの話題から新しい話題に転換させる行為の例である。「話題を切り出した回数」とは、(13)の下線部を「1回」、(14)の下線部を「1回」のように数えたものである。「話題の切り出しの始まりの言葉」とは、(13)では「え」、(14)では「俺ら」、「話題の切り出しの終わりの言葉」とは、(13)では「?」、(14)では「な」である。以下で各項目についての調査結果と考察を述べる。

3. 1. 話題を切り出した回数

3. 1. 1. 性別による違い

話題を切り出した回数の全体(延べ36名分)の平均値は15.81回(標準偏差5.62)であった。ここから「平均値±標準偏差×2」の基準に外れたものを外れ値と見なし、延べ6名分(調査番号1のB、調査番号2のA、調査番号9のL、調査番号9のM、調査番号14のO、調査番号16のU)のデータを考察対象外とした。その結果、話題を切り出した回数の平均値は15.63回(標準偏差3.19)となった。1回の会話の時間は約20分であり、会話の参加者は2名であることから、平均するとおよそ40秒に1回の割合で話題の切り出しが行われたということになる。

(15) 話題を切り出した回数(全体)

調査協力者	平均	標準偏差
延べ30名	15.63回	3.19

これを性別ごとにまとめると(16)ようになる。

(16) 話題を切り出した回数（性別ごと）

調査協力者	平均	標準偏差
男性（延べ13名）	14.15回	2.48
女性（延べ17名）	16.76回	3.21

男性同士の場合、およそ42秒に1回の割合で話題の切り出しが行われ、女性同士の場合、およそ36秒に1回の割合で話題の切り出しが行われたことになる。分散分析を行った結果、性別の効果は有意であった（ $F(1,28) = 5.52, p < 0.05$ ）。つまり、女性の方が、男性に比べ、話題を切り出した回数が有意に多かったということである。男性同士の会話・女性同士の会話を日常的に観察していても、女性同士の方が頻繁に話題が入れ替わるように思われたので、この結果は予想どおりであった。先行研究の結果と比較すると、内田（1997）は、初対面同士の会話において、男性の方が女性より沈黙の修復を行う回数が有意に多かったことを報告しており、小田切（1997）は、初対面の男女の会話において、男性の方が女性より話題転換の比率が高かったことを報告している。いずれも初対面同士の会話であり、その他にも本稿とは調査の条件が異なる点がいくつかあるため単純な比較は難しいが、会話の相手が同性であるか異性であるかによって話題の切り出しの方略が異なることを示唆しており、興味深い。今後は、男性同士・女性同士だけでなく、男女の会話を対象として追調査を行うなどし、より詳細に、話題の切り出しにおける性差を追究したい。

3. 1. 2. 関係性による違い

次に、話題を切り出した回数を、調査協力者間の関係性ごとにまとめたのが⁽¹⁷⁾である。

(17) 話題を切り出した回数（関係性ごと）

調査協力者	平均	標準偏差
相手が同学年（延べ18名）	16.00回	3.32
相手が先輩（延べ6名）	15.00回	2.94
相手が後輩（延べ6名）	15.17回	2.85

分散分析を行った結果、関係性の効果は有意ではなかった（ $F(2,27) = 0.28, p > 0.05$ ）。つまり、相手が同学年であるか、先輩であるか、後輩であるかという違いは、話題を切り出す回数とは無関係であったということである。先行研究の結果と比較すると、宇佐美（1998）は、初対面の女性同士の会話における話題導入の頻度を調べたところ、相手が年上、相手が同等、相手が年下の順に、話題導入の頻度が高くなっていったことを報告している。そこで、念のため、本稿でも、女性のデータに限って（⁽¹⁸⁾参照）分散分析を行ってみたが、やはり関係性の効果は有意ではなかった（ $F(2,14) = 0.52, p > 0.05$ ）。

(52)

(18) 話題を切り出した回数（関係性と性別一覧）

	相手が同学年	相手が先輩	相手が後輩	平均
男性	14.38回（8名）	14.50回（2名）	13.33回（3名）	14.15回
女性	17.30回（10名）	15.25回（4名）	17.00回（3名）	16.76回
平均	16.00回	15.00回	15.17回	15.63回

そこで、今度は、同じ調査協力者が、相手が同学年の場合と先輩あるいは後輩の場合とで、どのくらい切り出しの回数が異なるかを分析した。その結果は(19)と(20)のとおりである。

(19) 相手が同学年の場合と先輩の場合の違い^(注4)

調査協力者	F（男性）	H（女性）	P（女性）	W（女性）	平均	標準偏差
相手が同学年	13回	23回	19回	21回	19.00回	3.74
相手が先輩	12回	16回	17回	18回	15.75回	2.28

(20) 相手が同学年の場合と後輩の場合の違い^(注5)

調査協力者	D（男性）	N（男性）	S（男性）	J（女性）	平均	標準偏差
相手が同学年	14回	13回	12回	17回	14.00回	1.87
相手が後輩	14回	14回	12回	16回	14.00回	1.41

分散分析の結果、まず、相手が同学年の場合と先輩の場合（=19）、関係性の効果は有意ではなかった^(注6)。続いて、相手が同学年の場合と後輩の場合（=20）も、関係性の効果は有意ではなかった（ $F(1,3) = 0.00, p > 0.05$ ）。相手が同学年か先輩か後輩かという違いは、個人の中でも話題を切り出す回数に影響しないようである。

以上のように、話題を切り出した回数については、先行研究で見られたような、関係性の違いによる効果は観察されなかった。これは、本稿が、初対面ではなく顔見知り（年齢も近く普段から接点の多い関係）で調査を行ったことが影響していると考えられる。つまり、このような関係の場合は、初対面の場合と異なり、相手が先輩であっても後輩であっても、心理的な距離や配慮の必要性などが同学年を相手にした場合と変わらなかったということであろう。

3. 2. 話題の切り出しの始まりの言葉

3. 2. 1. 性別による違い

本節では、話題を切り出したときの始まりの言葉に注目する。今回の調査では、考察対象外となった6名を除く延べ30名から、話題の切り出しが合計469例観察されたのであるが、その中で、始まりの言葉として特に頻度が高かったもの（上位10種類）をまとめると(21)のようになる。

⑭ 話題の切り出しの始まりの言葉（上位 10 種類：全体）

言葉	回数	内訳
①「え」系	53回	「え」47「えー」6
②「でも」系	50回	「でも」41「でもな」3「でもなー」1「けど」5
③「なんか」系	46回	「なんか」39「なんかさー」2「なんかさ」1「なんかな」3「なんかなー」1
④「いや」系	35回	「いや」22「いやー」7「や」4「やー」1「いやな」1
⑤「で」系	19回	「で」18「でな」1
⑥「まあ」系	17回	「まあ」11「まあな」1「まあ」2「まー」1「ま」2
⑦「あ」系	15回	「あ」11「あー」3「あーなー」1
⑧「もう」系	15回	「もう」14「もうね」1
⑨「あの」系	12回	「あの」7「あのー」3「あのな」2
⑩「てか」系	11回	「てか」7「てかさ」2「ていうか」1「てかな」1
合計	273回	

上位 10 種類の合計が 273 回であり、話題の切り出しが合計 469 例であることから、上位 10 種類が全体の 58.2% を占めていたことになる。

これを性別ごとにまとめると⑮のようになる。

⑮ 話題の切り出しの始まりの言葉（上位 10 種類：性別ごと：合計）

言葉	男性 (13 名)	女性 (17 名)	合計 (30 名)
①「え」系	17回	36回	53回
②「でも」系	15回	35回	50回
③「なんか」系	11回	35回	46回
④「いや」系	22回	13回	35回
⑤「で」系	10回	9回	19回
⑥「まあ」系	12回	5回	17回
⑦「あ」系	9回	6回	15回
⑧「もう」系	6回	9回	15回
⑨「あの」系	8回	4回	12回
⑩「てか」系	9回	2回	11回
合計	119回	154回	273回

ただし、男性と女性とでは調査協力者の人数が異なるため、⑮の数値を直接比較することはできない。そこで、男性・女性、それぞれ一人当たりの回数にそろえたのが⑯である。

②3 話題の切り出しの始まりの言葉（上位 10 種類：性別ごと：一人当たり）

言葉	男性	女性
①「え」系	1.31 回（標準偏差 1.64）	2.12 回（標準偏差 1.68）
②「でも」系	1.15 回（標準偏差 1.46）	2.06 回（標準偏差 1.73）
③「なんか」系	0.85 回（標準偏差 1.17）	2.06 回（標準偏差 1.59）
④「いや」系	1.69 回（標準偏差 1.20）	0.76 回（標準偏差 0.88）
⑤「で」系	0.77 回（標準偏差 1.37）	0.53 回（標準偏差 0.85）
⑥「まあ」系	0.92 回（標準偏差 1.00）	0.29 回（標準偏差 0.57）
⑦「あ」系	0.69 回（標準偏差 0.72）	0.35 回（標準偏差 0.48）
⑧「もう」系	0.46 回（標準偏差 0.75）	0.53 回（標準偏差 0.70）
⑨「あの」系	0.62 回（標準偏差 0.84）	0.24 回（標準偏差 0.42）
⑩「てか」系	0.69 回（標準偏差 0.72）	0.12 回（標準偏差 0.32）

分散分析を行ったところ、性別の効果が有意であったのは、③「なんか」系（ $F(1,28) = 5.00, p < 0.05$ ）と④「いや」系（ $F(1,28) = 5.58, p < 0.05$ ）と⑥「まあ」系（ $F(1,28) = 4.42, p < 0.05$ ）と⑩「てか」系（ $F(1,28) = 7.98, p < 0.01$ ）の 4 項目であった。つまり、③「なんか」系は女性の方が使用頻度が高く、④「いや」系と⑥「まあ」系と⑩「てか」系は男性の方が使用頻度が高かったということである。先行研究の結果と比べると、先述した内田（1997）は、初対面同士の会話において、「なんか」は女性の方に有意に多く、「まあ」は男性の方に有意に多いという結果を報告しており、本稿の結果と共通する点が多い。相手が初対面であっても顔見知りであっても性別による特徴が変わらないということは、相手が初対面か顔見知りかという違いは、話題の切り出しの始めの言葉の選択にそれほど影響しないということであろう。一方、初対面・同性・年齢差 10 歳以上のペアの会話を分析している田中（2015）の結果と比較すると、「いや」が男性の方に使用が偏っていたことは本稿の結果と共通しているが、「なんか」と「まあ」については、田中（2015）の調査では性別による違いは特に観察されなかったようである^(注7)。後述するように、本稿では、話題の切り出しの始まりの言葉について関係性の効果は観察されなかったのであるが、本稿では相手が同学年の場合のデータが大多数（30 名中 18 名）を占めていたことから、相手が同学年の場合の性別による違いが全体の性別による違いとして現れていた可能性がある。今後さらに追究していきたい。

3. 2. 2. 関係性による違い

次に、話題の切り出しの始まりの言葉を、調査協力者間の関係性ごとにまとめると②4のようになる。

24) 話題の切り出しの始まりの言葉（上位 10 種類：関係性ごと：合計）

言葉	同学年 (18 名)	相手が先輩 (6 名)	相手が後輩 (6 名)	合計
①「え」系	31 回	12 回	10 回	53 回
②「でも」系	25 回	8 回	17 回	50 回
③「なんか」系	26 回	12 回	8 回	46 回
④「いや」系	25 回	3 回	7 回	35 回
⑤「で」系	14 回	4 回	1 回	19 回
⑥「まあ」系	12 回	2 回	3 回	17 回
⑦「あ」系	12 回	0 回	3 回	15 回
⑧「もう」系	8 回	2 回	5 回	15 回
⑨「あの」系	8 回	0 回	4 回	12 回
⑩「てか」系	10 回	1 回	0 回	11 回
合計	171 回	44 回	58 回	273 回

これを、相手が同学年・先輩・後輩の場合のそれぞれについて、一人当たりの回数にそろえたのが(25)である。

25) 話題の切り出しの始まりの言葉（上位 10 種類：関係性ごと：一人当たり）

言葉	相手が同学年	相手が先輩	相手が後輩
①「え」系	1.72 回 (標準偏差 1.76)	2.00 回 (標準偏差 1.53)	1.67 回 (標準偏差 1.70)
②「でも」系	1.39 回 (標準偏差 1.57)	1.33 回 (標準偏差 1.11)	2.83 回 (標準偏差 1.95)
③「なんか」系	1.44 回 (標準偏差 1.71)	2.00 回 (標準偏差 1.15)	1.33 回 (標準偏差 1.25)
④「いや」系	1.39 回 (標準偏差 1.25)	0.50 回 (標準偏差 0.76)	1.17 回 (標準偏差 0.69)
⑤「で」系	0.78 回 (標準偏差 1.23)	0.67 回 (標準偏差 1.11)	0.17 回 (標準偏差 0.37)
⑥「まあ」系	0.67 回 (標準偏差 0.94)	0.33 回 (標準偏差 0.47)	0.50 回 (標準偏差 0.76)
⑦「あ」系	0.67 回 (標準偏差 0.58)	0.00 回 (標準偏差 0.00)	0.50 回 (標準偏差 0.76)
⑧「もう」系	0.44 回 (標準偏差 0.68)	0.33 回 (標準偏差 0.75)	0.83 回 (標準偏差 0.69)
⑨「あの」系	0.44 回 (標準偏差 0.68)	0.00 回 (標準偏差 0.00)	0.67 回 (標準偏差 0.75)
⑩「てか」系	0.56 回 (標準偏差 0.68)	0.17 回 (標準偏差 0.37)	0.00 回 (標準偏差 0.00)

分散分析を行ったところ、関係性の効果が有意であったものはなかった^(注8)。その原因は、「話題の切り出しの回数」同様、今回の調査対象者が顔見知り（年齢も近く普段から接点の多い関係）であることが影響していると考えられる。つまり、このような関係の場合は、相手が先輩であっても後輩であっても、心理的な距離や配慮の必要性などが同学年を相手にした場合と変わらなかったということであろう。ただし、相手が先輩の場合と相手が後輩の場合はいずれも 6 名ずつとデータが少なかったことが影響している可能性もある。先述した田中 (2015) の調査結果では、「でも」「いや」「あの」の使用が年長者に偏っており、本稿で

(56)

これらが平均値だけを見ると「相手が先輩」の場合に比べて「相手が後輩」の場合に多かったことと一致するからである。今後、データを追加してさらなる検証を行うことが必要であろう。

3. 3. 話題の切り出しの終わりの言葉

3. 3. 1. 性別による違い

本節では、話題を切り出したときの終わりの言葉に注目する。今回の調査では、考察対象外となった6名を除く延べ30名から、話題の切り出しが合計469例観察されたのであるが、その中で、終わりの言葉として特に頻度が高かったもの（上位10種類）をまとめると⑯6のようになる。

⑯6 話題の切り出しの終わりの言葉（上位10種類：全体）

言葉	回数	内訳
①「？」	102回	
②「よ」系	63回	「よ」62「よー」1
③「な」系	45回	「な」35「なあ」10
④「て」	23回	
⑤「やな」	14回	
⑥「けど」	13回	
⑦「やん」	13回	
⑧「よな」系	10回	「よな」9「よなー」1
⑨「から」	9回	
⑩「みたいな」	9回	
合計	301回	

上位10種類の合計が301回であり、話題の切り出しが合計469例であることから、上位10種類が全体の64.2%を占めていたことになる。前節で見た話題の切り出しの始めの言葉の場合（上位10種類で273回、58.2%）と比較すると、より少ない種類で全体の多くを占めていることが分かる。特に、話題の切り出しの始めは上位3種類（「え」系、「でも」系、「なんか」系）で149回、31.5%であったのに対し、話題の切り出しの終わりは上位3種類（「？」、「よ」系、「な」系）だけで210回、44.8%を占めており、違いが顕著である。

これを性別ごとにまとめると⑯7のようになる。

27) 話題の切り出しの終わりの言葉（上位 10 種類：性別ごと：合計）

言葉	男性 (13 名)	女性 (17 名)	合計 (30 名)
①「？」	37 回	65 回	102 回
②「よ」系	31 回	32 回	63 回
③「な」系	16 回	29 回	45 回
④「て」	7 回	16 回	23 回
⑤「やな」	8 回	6 回	14 回
⑥「けど」	0 回	13 回	13 回
⑦「やん」	6 回	7 回	13 回
⑧「よな」系	8 回	2 回	10 回
⑨「から」	7 回	2 回	9 回
⑩「みたいな」	3 回	6 回	9 回
合計	123 回	178 回	301 回

これを、男性・女性、それぞれ一人あたりの回数にそろえたのが²⁸⁾である。

28) 話題の切り出しの終わりの言葉（上位 10 種類：性別ごと：一人当たり）

言葉	男性	女性
①「？」	2.85 回 (標準偏差 1.79)	3.82 回 (標準偏差 2.23)
②「よ」系	2.38 回 (標準偏差 2.62)	1.88 回 (標準偏差 1.91)
③「な」系	1.23 回 (標準偏差 1.67)	1.71 回 (標準偏差 1.74)
④「て」	0.54 回 (標準偏差 0.75)	0.94 回 (標準偏差 1.06)
⑤「やな」	0.62 回 (標準偏差 0.92)	0.35 回 (標準偏差 0.76)
⑥「けど」	0.00 回 (標準偏差 0.00)	0.76 回 (標準偏差 0.94)
⑦「やん」	0.46 回 (標準偏差 0.93)	0.41 回 (標準偏差 0.69)
⑧「よな」系	0.62 回 (標準偏差 0.84)	0.12 回 (標準偏差 0.32)
⑨「から」	0.54 回 (標準偏差 0.75)	0.12 回 (標準偏差 0.32)
⑩「みたいな」	0.23 回 (標準偏差 0.58)	0.35 回 (標準偏差 0.59)

分散分析を行ったところ、性別の効果が有意であったのは、⑥「けど」($F(1,28) = 8.01$, $p < 0.01$)と⑧「よな」系($F(1,28) = 4.71$, $p < 0.05$)の2項目であった^(注9)。つまり、⑥「けど」は女性の方が使用頻度が高く、⑧「よな」系は男性の方が使用頻度が高かったということである。「よな」が男性の方に偏って用いられる傾向のある表現であることは、すでに様々な調査で明らかになっている (cf. 太田 1992、内田 1997、米澤 2005、小川 2006 など) が、例えばテレビドラマを対象として調査を行った太田 (1992) でも、現代日本語研究会 (1997) と現代日本語研究会 (2002) を話し言葉のデータとして分析した三枝 (2007) でも、「けど」は女性にも男性にも多く用いられていることが報告されており、本稿での結果

(58)

と一致しない。本稿の調査では、男性の調査協力者たちも接続助詞の「けど」は使用していたのだが、「けど」で終わらず、そのまま最後まで文として話し切ることが多かったようである。なぜ本稿の調査協力者にそのような傾向が見られたのかは不明であるが、今後の課題としておきたい。

3. 3. 2. 関係性による違い

次に、話題の切り出しの終わりの言葉を、調査協力者間の関係性ごとにまとめると(29)のようになる。

(29) 話題の切り出しの終わりの言葉 (上位 10 種類：関係性ごと：合計)

言葉	同学年 (18 名)	相手が先輩 (6 名)	相手が後輩 (6 名)	合計
①「？」	70 回	16 回	16 回	102 回
②「よ」系	31 回	23 回	9 回	63 回
③「な」系	28 回	0 回	17 回	45 回
④「て」	11 回	6 回	6 回	23 回
⑤「やな」	8 回	0 回	6 回	14 回
⑥「けど」	7 回	4 回	2 回	13 回
⑦「やん」	12 回	0 回	1 回	13 回
⑧「よな」系	4 回	0 回	6 回	10 回
⑨「から」	4 回	2 回	3 回	9 回
⑩「みたいな」	6 回	2 回	1 回	9 回
合計	181 回	53 回	67 回	301 回

これを、相手が同学年・先輩・後輩の場合のそれぞれについて、一人当たりの回数にそらえたのが(30)である。

(30) 話題の切り出しの終わりの言葉 (上位 10 種類：関係性ごと：一人当たり)

言葉	相手が同学年	相手が先輩	相手が後輩
①「？」	3.89 回 (標準偏差 2.18)	2.67 回 (標準偏差 1.70)	2.67 回 (標準偏差 1.80)
②「よ」系	1.72 回 (標準偏差 2.33)	3.83 回 (標準偏差 1.57)	1.50 回 (標準偏差 1.71)
③「な」系	1.56 回 (標準偏差 1.61)	0.00 回 (標準偏差 0.00)	2.83 回 (標準偏差 1.77)
④「て」	0.61 回 (標準偏差 0.95)	1.00 回 (標準偏差 0.82)	1.00 回 (標準偏差 1.00)
⑤「やな」	0.44 回 (標準偏差 0.76)	0.00 回 (標準偏差 0.00)	1.00 回 (標準偏差 1.15)
⑥「けど」	0.39 回 (標準偏差 0.76)	0.67 回 (標準偏差 1.11)	0.33 回 (標準偏差 0.47)
⑦「やん」	0.67 回 (標準偏差 0.94)	0.00 回 (標準偏差 0.00)	0.17 回 (標準偏差 0.37)
⑧「よな」系	0.22 回 (標準偏差 0.53)	0.00 回 (標準偏差 0.00)	1.00 回 (標準偏差 0.82)
⑨「から」	0.22 回 (標準偏差 0.53)	0.33 回 (標準偏差 0.75)	0.50 回 (標準偏差 0.50)
⑩「みたいな」	0.33 回 (標準偏差 0.67)	0.33 回 (標準偏差 0.47)	0.17 回 (標準偏差 0.37)

分散分析を行ったところ、関係性の効果が有意であったのは、③「な」系 ($F(2,27) = 5.01, p < 0.05$) と⑧「よな」系 ($F(2,27) = 5.27, p < 0.05$) の2項目であった。そこで多重比較 (HSD法) を行ったところ、③「な」系に関しては「相手が先輩」の場合と「相手が後輩」の場合の差が有意であり ($MSe = 2.4177, p < 0.05$)、それ以外は有意ではなかった。つまり、「相手が後輩」の場合は、「相手が先輩」の場合よりも「な」系の使用が多かったということである。⑧「よな」系についても多重比較 (HSD法) を行ったところ、「相手が同学年」の場合と「相手が後輩」の場合、および、「相手が先輩」の場合と「相手が後輩」の場合の差が有意であり ($MSe = 0.3374, p < 0.05$)、それ以外は有意ではなかった。つまり、「相手が後輩」の場合に、他の場合に比べ「よな」系の使用が多かったということである。これら2つの結果は、「～な」という表現が目上には使えないものであることを考えると当然の結果であると言えるが、これまでの2観点 (話題の切り出しの回数と話題の切り出しの始めの言葉) では、相手が顔見知り (近い関係) であることが影響して、関係性の違いが言語使用の違いに反映されていなかったことを考えると興味深い。顔見知りであっても (顔見知りだからこそ)、話し手の心的態度が表される文末表現については、相手に失礼のないよう配慮したということだろう。

4. まとめと今後の課題

本稿では、顔見知り同士の大学生の日本語母語話者に約20分の会話を行ってもらい、そこで観察された話題の切り出しを、性別の違い (男性・女性) と相手との関係性の違い (同学年・先輩・後輩) に注目して分析した。本稿の調査で得られた結果をまとめると(31)のようになる。

(31) 本稿の調査で得られた結果のまとめ

	性別の違い	相手との関係性の違い
話題を切り出した回数	男性より女性の方が有意に多かった。	相手が同学年でも先輩でも後輩でも有意な差はなかった。 →顔見知りの場合は初対面の場合に比べ、関係性の違いによる心理的な距離や配慮の必要性が大きくないためであると考えられる。
話題の切り出しの始まりの言葉	男性より女性の方が③「なんか」系の使用が有意に多く、女性より男性の方が④「いや」系・⑥「まあ」系・⑩「てか」系の使用が有意に多かった。 →初対面を対象とした先行研究の結果	相手が同学年でも先輩でも後輩でも有意な差はなかった。 →顔見知りの場合は初対面の場合に比べ、関係性の違いによる心理的な距離や配慮の必要性が大きくないためであると考え

	と一致する部分が多かった。相手が初対面か顔見知りかという違いは、話題の切り出しの始まりの言葉の選択に影響しないと考えられる。	られる。
話題の切り出しの終わりの言葉	男性より女性の方が⑥「けど」の使用が有意に多かった。 →先行研究では性別による違いが観察されなかったので、先行研究とは異なる結果であった。 女性より男性の方が⑧「よな」系の使用が有意に多かった。 →先行研究で指摘されているとおり、「よな」は男性偏重の表現だからであろう。	相手が先輩の場合より相手が後輩の場合の方が③「な」系の使用が有意に多かった。また、相手が後輩の場合はそれ以外の場合より⑧「よな」系の使用が有意に多かった。 →話し手の心的態度が表される文末表現については、たとえ顔見知りの相手であっても（顔見知りの相手だからこそ）、失礼のないよう配慮する必要があるということだろう。

ただし、課題もある。本稿の調査では、相手が先輩の場合と相手が後輩の場合のデータが6名分と少なかったことである。「話題を切り出した回数」と「話題の切り出しの始まりの言葉」で関係性の効果が有意ではなかったのは、標本数の不足が原因である可能性があるため、今後はデータを追加してさらなる検証を行う必要がある。

また、本稿では、紙幅の都合により、話題の切り出しとして抽出できたデータのうち、言語的な側面、その中でも特に始まりの言葉と終わりの言葉しか扱うことができなかった。言語的な側面には他にも接続表現やフィラー、相槌などの要素があり、また、沈黙や笑いといった非言語的な側面も重要である。また、言語・非言語という観点だけでなく、切り出された話題の先行する話題との関係（何のつながりもない新規の話題なのか、何らかのつながりのある派生的な話題なのか、最初はつながりがないように見えるがその後つながりが見出されるタイプの話題なのか、など）も談話研究においては重要である。さらに、本稿では計量的な分析により一般性を見出すことに焦点を絞ったが、高井（2015）で扱っていたような^(注10)、個人が持つ「会話に対する意識」とその個人が行う「会話の切り出し」の方略の相関など、言語使用者の言語使用とその背景についてもさらに追究していきたい。

(注)

- (1) 初対面会話の特質や初対面会話研究の詳細については、三牧（2013）に詳しい。
- (2) 性別の比較については、本稿では、「男性同士」と「女性同士」に限定した。「男性から女性」「女性から男性」への切り出しの違いも興味深いところであるが、本稿の範囲を越えているため、また稿を改めて論じたい。
- (3) 学年は調査当時（2014年7月から12月にかけて）のものである。
- (4) 本来、ここには調査協力者Lと調査協力者Oも含まれるはずであるが、調査協力者L

- は相手が同学年のときのデータが、調査協力者 O は相手が先輩のときのデータが、ともに外れ値として考察対象外となったため、ここに含まれていない。
- (5) 本来、ここには調査協力者 A と調査協力者 U も含まれるはずであるが、調査協力者 A は相手が後輩のときのデータが、調査協力者 U は相手が同学年のときのデータが、ともに外れ値として考察対象外となったため、ここに含まれていない。
- (6) ただし有意傾向が見られた ($F(1,3) = 6.11, 0.10 > p > 0.05$)。
- (7) また、田中 (2015) の調査では「てか」は観察されなかったようである。これは田中 (2015) が年齢差 10 歳以上のペアを対象としていることが関係していると思われる。本稿の調査では⑩「てか」系の使用はほぼ相手が同学年の場合に限られていたからである。
- (8) ただし⑦「あ」系については有意傾向が見られた ($F(2,27) = 2.84, 0.10 > p > 0.05$)。
- (9) ただし⑨「から」については有意傾向が見られた ($F(1,28) = 4.06, 0.10 > p > 0.05$)。
- (10) 高井 (2015) では、本稿で注目した 3 つの観点 (12) に加え、「切り出し方 (始まりと終わりの組み合わせ)」「誰のことについての切り出しか」「どのように話題を切り出したり展開させたりしているか」も考察対象とした。また、調査協力者全員に会話に対する意識調査を行い、その調査協力者が会話に対してどのような意識を持っているかと、その調査協力者がどのような話題の切り出しを行っていたかの相関を考察した。

(附記)

本稿は、筆頭著者の卒業論文 (高井 2015) にデータを加え、内容の一部を大幅に加筆・修正したものである。高井 (2015) でデータとしていたのは、調査協力者 A ~ R の 18 名、調査番号 1 ~ 13 の 13 組であったため、本稿は、高井 (2015) より調査協力者を 6 名、ペアを 5 組加えて分析したことになる。

〈参考文献〉

- 宇佐美まゆみ (1998) 「初対面二者間会話における「ディスコース・ポライトネス」」『ヒューマン・コミュニケーション研究』第 26 号、日本コミュニケーション学会、pp.49-61.
- 内田伸子 (1997) 「会話行動に見られる性差」井出祥子編『日本語学叢書 女性語の世界』明治書院、pp.74-93.
- 太田淑子 (1992) 「談話にみる性差の様相 - 終助詞を中心として -」『横浜国立大学教育紀要』第 32 集、横浜国立大学、pp.329-342.
- 小川小百合 (2006) 「話しことばの終助詞の男女差の実際と意識 - 日本語教育への活用へ向けて -」日本語ジェンダー学会編『日本語とジェンダー』ひつじ書房、pp.39-51.

- 小田切由香子 (1997) 「異言語文化間・男女間コミュニケーションにおける性差－会話開始における話題転換上の特徴－」『横浜国立大学留学生センター紀要』第4号、pp.42-53.
- 奥山洋子 (2000) 「韓・日同国人女子大学生同士の初対面の会話」『日本語学報』第45輯、韓国日本学会、pp.117-132.
- 奥山洋子 (2005) 「話題導入における日韓のポライトネス・ストラテジー比較－日本と韓国の大学生初対面会話資料を中心に－」『社会言語科学』第8巻 第1号、社会言語科学会、pp.69-81.
- 現代日本語研究会 (1997) 『女性のことば・職場編』ひつじ書房.
- 現代日本語研究会 (2002) 『男性のことば・職場編』ひつじ書房.
- 三枝令子 (2007) 「話し言葉における「が」「けど」類の用法」『一橋大学留学生センター紀要』10号、一橋大学留学生センター、pp.11-27.
- 高井春菜 (2015) 「話題の切り出しと転換について－言語的方略と会話に対する意識の相関－」鳴門教育大学学校教育学部卒業論文.
- 田中奈緒美 (2015) 「話題転換時における談話標識の使用に関する日中比較」『島根大学外国語教育センタージャーナル』第10号、島根大学外国語教育センター、pp.131-141.
- 田中奈緒美・崔沫舒 (2014) 「話題転換ストラテジーの使用傾向から見る話題転換方法の日中比較」『中国語話者のための日本語教育研究』第5号、日中言語文化出版社、pp.47-61.
- 花村博司 (2014) 「日本語の雑談会話における話題転換研究の方法－話題転換はどこで行われ、どう分類されるか－」『言語文化学研究 言語情報編』第9号、大阪府立大学人間社会学部言語文化学科、pp.71-99.
- 三牧陽子 (2013) 「初対面会話研究と本研究」『ポライトネスの談話分析 初対面コミュニケーションの姿としくみ』くろしお出版、pp.1-21.
- 楊虹 (2005a) 「話題転換研究の概観－タイプと方略を中心に」『言語文化と日本語教育 増刊特集号 第二言語習得・教育の研究最前線』、お茶の水女子大学日本言語文化学会、pp.159-185.
- 楊虹 (2005b) 「日本語母語場面の会話に見られる話題開始表現」『人間文化論叢』第8巻、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科、pp.327-336.
- 楊虹 (2007) 「中日母語場面の話題転換の比較－話題終了のプロセスに着目して－」『日本語教育論集 世界の日本語教育』第17号、独立行政法人国際交流基金、pp.37-52.
- 米澤昌子 (2005) 「終助詞の使用頻度と性差傾向－シナリオを資料として－」『同志社大学留学生別科紀要』第5号、同志社大学、pp.49-60.
- 季珂南 (2014) 「日中大学生接触場面の初対面会話における話題転換－「ラポールマネジメント」の視点から－」『日本語教育』157号、日本語教育学会、pp.17-31.

林河運（2008）「日韓初対面会話の質問による話題導入の対照研究－ポライトネスの観点から－」『現代社会文化研究』第41号、新潟大学大学院現代社会文化研究科、pp.149-166.

（たかい はるな・阿南市橘小学校）

（たなか だいき・本学教員）